
「蒼島の植物」ご説明について

寒 蟬 義 一

昭和43年10月4日第23回国民体育大会のため御来県された天皇皇后両陛下に対し、御宿舎小浜市青浜館において「蒼島の植物」についてご説明申し上げる光榮に浴した。これは堀芳孝先生始め福井郷土博物館関係者の永年にわたる御指導の賜と深く感謝している。

のことについて具体的な交渉が始まったのはかねてからご指導を受けている京都大学植物学教室主任教授北村四郎先生から来信のあったことからである。北村先生は毎年陛下が那須へお出かけの折お伴をして植物研究の御相手をされる学者グループの1人である。北村先生の手紙によれば6月25日に那須の植物についてご進講した折、徳川義寛侍従から「この秋に行なわれる国民体育大会には福井県へ行幸啓されるが、陛下が時間的に余裕があられるならばどこか適当な場所の植物をご覧になりたい希望がおありであり、福井県からは蒼島を候補地としてあげているが適当な場所かどうか、また陛下にご説明申し上げるのに適当な人を推せんしてほしい」との相談を受けたが、このうち説明役として私に引き受けよとのことである。私はこの手紙をいただいて県の行幸啓本部に相談したところ、県も私を推せんするつもりであるというので、微力ながらお引き受けしたのである。

蒼島は小浜湾に浮かぶ無人の小島で、小浜市街地から西方へ約5km最も近い旧加斗村荒木の海岸岸から北へ約1kmの地点にある。私ども植物の分布に興味をもつものにとっては極めて注目すべきところで、このあたりの緯度（北緯35°29'）の割には暖地性植物が多く、かつ原生林の姿がよく保たれている。殊にナタオレノキは本州唯一の産地、ムサシアブミは日本海側における北限地であり、その他にも分布上留意すべき植物が数種類見られる。このため昭和26年に蒼島暖地性植物群落として国の天然記念物に指定されている。

しかし、この島へ行くには定期船の便がなく、高い料金を出して漁船をやどわなければならぬので、私は十数年前に一度行っただけで最近の様子は知らない。それで、この年の夏休みは数回にわたって蒼島の植物を調査することにした。

記録としては、県文化財報告書に今井長太郎氏の書かれたものがあるので、これを参考にした。しかし調査してみると、植物の世界にも栄枯盛衰があり、今井氏の報告書に書かれているものとはかなり様子の変っている点もあった。

例えば今井氏の報告書にはマンリヨウが記載しており、もしこれがこの島に産するならば特記

すべき点である筈だが、いくら探しても見当らない。また、帰化植物のヨウシユヤマゴボウが島の入口の鳥居わきに繁茂しており、この無人の島にも俗化の波がおしよせていることを感じた。これは今井氏の報告書には記載されてない植物である。

それはさておき8月に ると宮内庁の人を迎えて行幸啓に関係する場所の下検分が行なわれた。私も県の計画にしたがって8月7日にこの一行に加わり蒼島を訪れた。県の係官は御召艇の発着する橋をどうするか、島内の小径をどのように補修するか等の打合せをしているが、私は徳川侍従やこのためわざわざ京都からかけつけてくれた北村教授および村田源先生と共に島内を歩き植物調査かたがたご説明の細部についての打合せを行なった。北村先生によると、陛下は植物の専門家であらせられる上に頭のよいお方でもあられるので、仮にも誤慮化したような説明を申し上げると、後からやんわり反論されるから気をつけるようにとの事であった。これは北村先生が那須での体験にもとづく忠告であるので、ありがたく拝聴した。

この下検分が終ってから侍従一行の宿舎で、徳川侍従、北村教授および村田先生と昼食を共にした。一応その日の主な任務を終ってからの昼食であるので、食後かなりの時間をかけて雑談を交した。徳川侍従は和歌山藩主の末裔とかで、風貌は何どなく上品で人あたりがやわらかく気品の高さを感じさせる方であるが、北村教授はむしろ野人の風格があり、何事についても思いついたことをかくすことなくざっくばらんに話すタイプの人である。この二人はかなり親しい仲とみて、北村先生は徳川さんに対し盛に俗世間の知識を注入しておられた。たまたま見下す海岸に海水着姿の娘さんがいたが、この娘さんの肉体美も北村先生の話題にのぼり、徳川さんは苦笑しておられた。しかし、徳川さんはかって昭和20年8月の終戦に際して、宮中に乱入した叛乱軍から、軍力の威圧にも屈せず、終戦の玉音盤を守り通した勇者なのである。徳川さんはこのことにふれたがらないか、あのおとなしそうな徳川さんのどこにこのような勇気がひそんでいるか不思議に思うと共に、眞の勇者とはこのような人をさすのではないかと認識を新たにした。

さて、蒼島の調査を終りご説明の原稿を書く段階になって、私にはいろいろ疑問な点や不確実な点が出て來た。その度に北村先生に手紙を出してお教えを願ったのであるが、先生は京都大学の標本を探したり文献を調べたりして懇切丁寧なお返事を下さった。殊に自分も共に勉強しようとの態度には頭の下る想いであり、教師である私も見習わなければならぬと思った。なお、この段階で北村先生は古い標本からナタオレノキが台湾にも産することを発見された。ナタオレノキは八丈島、小笠原諸島、沖縄、九州、巨文島(朝鮮)および蒼島に産することは既に学会に報告されているが、台湾に産することは未報告なのである。

いよいよ10月1日となり、福井国体は奇蹟の開会式で開始された。私は私に与えられた任務

を果す4日も晴天であることを祈らずにはいられなかった。しかし、3日頃から雲行きがあやしくなり、4日は朝から降ったり、やんだりの天候であった。私は朝早く汽車に乗り小浜へ直行した。小浜土木出張所で作業衣と雨合羽をかり、9時から行なわれる御召艇の接岸予行の船に便乗して蒼島へわたり、最後の現地調査を行なった。ムサシアブミは草本であるので秋の寒さのために葉がいたんでいるのではないかの心配は杞憂であった。しかし、ナタオレノキの花がもしや咲いているのではないかとの希望はかなえられなかつた。カラタチバナの実はかなり大きくなり色づいていた。タキキビはほとんど枯草同様であった。

予定では、晴天ならば両陛下は午後2時にご宿舎を出られて蒼島にわたりご散策、雨天ならば午後2時半からお宿舎でご説明申し上げることになっていた。そして、その何れにするかの決定は午前10時のことであった。私は11時頃まで島にいたが、天候は相変らず降ったりやんだりなので、晴雨両用の用意をすることにし、雨天の場合を考慮して島の植物を探集しお宿舎へ持ち帰った。お宿舎へ着いたのは11時半を過ぎていたが、県の係官によると決定は正午過ぎに持ち越すことであった。この頃両陛下は若狭高校で行なわれているボクシング競技をご覧になっておられたが、連絡のためご宿舎へ来た係官の話によると、両陛下は午後の蒼島御散策を非常に期待しておられるとのことであった。私は持ち帰った植物を整理しているうちに、両陛下がご宿舎へ向われたとの連絡を受けたので、急いで作業衣のまま玄関でお出迎えをした。そして両陛下御到着後直ちに徳川さんを中心として県の係官、海上保安庁職員、気象台職員および私の5人で午後の日程を決定する会議が開かれた。海上保安庁職員からは「波は静かでお召艇は出せる」との報告があったが、気象台職員からは「鳥取以西の雲は切れて来たが、この地方は2~3時間の間は晴れる見込みはない」との報告、私からは「島の道路状態が悪くすべりやすい」と報告した。結局決行は困難との判断により、徳川侍従よりこの旨上奏されたが、直ちにもどって来られて「決定をもう30分延期する」とのことであった。しかし、30分たっても天候は回復せず、蒼島へのご散策は中止、ご宿舎でご説明に決定した。再三の決定延期は陛下が如何に蒼島ご散策を期待しておられたかを物語るもので、陛下のお心を拝察するにさぞかし残念であらせられたと思われる。

両陛下へのご説明は御宿舎の一室で行なわれ、両陛下の外に宇佐美宮内庁長官、入江侍従長、徳川侍従等3名の侍従、2名の女官が陪席した。私は蒼島の植物分布上特色ある点を島から採集した植物を中心としてご説明申し上げた。特にナタオレノキ、ムサシアブミ、タキキビ、カラタチバナについては分布図と写真をご覧にいれ、ナタオレノキについては学名や和名の変遷についてもご説明申し上げた。天皇陛下は植物をお手にとられ、説明を納得されると力強く「ウン」と

うなずいておられ、また皇后陛下に対し小声で補足的な解説をされていた。一通り説明が終ったあとで「このように暖地性植物が多いのは附近に暖流が流れているからか」「この島の積雪量はどれくらいか」「嶺南と嶺北の植物分布はどうにちがうか」「ナタオレノキの花はいつ咲くのか」等かなりつっこんだご質問があった。ナタオレノキの花については北村先生の忠告を思い出して「図鑑には11月から12月にかけて咲くと書いてあるが、私は花の頃にこの島へ来たことがないので、いつ咲くか存じません」とお答えしたら、天皇陛下は笑ってうなずいておられた。皇后陛下は始めから終りまで天皇陛下と私の言葉のやりとりに笑みを浮かべておられたが、常にひかえ目で天皇陛下をおたてになるやさしいお心くばりをされているように拝察した。最後に両陛下はお立ちになり「本日はいろいろ説明してくれてありがとう。今後とも郷土の植物を研究するように」とのお言葉を賜った。ご説明後宇佐美長官や入江侍従長からも感謝の言葉がありご下賜品をいただいた。なお、私が持参した写真および島から採集した植物は皇居へお持ち帰りになる由である。

その後記者会見をして、お世話になった人々にお礼を言って帰途についていたのであるが、帰りぎわに徳川侍従から「両陛下は御居室の窓から雨にかすんで見える蒼島をご覧になり、行かれなかったことを残念がっておられた」由承った。帰宅後午後9時頃電話があり、侍従を通して更に2～3のご質問があった。話を単に聞き流しにされるのではなく、夜までご研究のご様子で陛下の熱心さには頭の下る思いである。